



阿川弘之著

末の末っ子

文藝春秋版

末の末っ子^{すえ すえ こ}

昭和五十二年十月二十五日 第一刷

定価九五〇円

著者 阿川^{あがわ}弘^{ひろ}之^{ゆき}

発行者 檜^ひ原^{はら}雅^{みや}春^{はる}

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

郵便番号一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

・万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

長篇小説／末の末っ子／目次

夕 映 え	5	軍 艦 物 語	162
これやこの	33	女 子 大 生	174
海 軍 記 者	48	春 や 春	188
鳥啼き花落ち	59	伯 母 の 上 京	207
目 標 六 割	72	誕 生	221
穴 八 幡	85	宇品湾頭雲はるか	236
海 の 民 な ら	100	梅 雨 の 入 り	249
餅 つ き	118	歌 仙 会	268
年の始めの	133	夏 から 秋 へ	279
謡 の 稽 古	148		

長篇小説

末の末っ子

装画・カット
大 歳 克 衛

夕 映 え



半分以上の空で、耕平は答えた。
頭の中が、来年から始まる連載長編のことでいっぱいになっていて。調べものに、ひどく手のかかりそうな厄介な仕事であつた。

古文書といつては大げさだが、半世紀も前の、官庁の極秘資料の写しや、アメリカ海軍の提督が書きのこした英文の回想録や、ほこりだらけの雑書が、部屋中雑多にちらかつていた。

「さつき」

春子は、雑書の山と強い西日とに眼をそばめながら、少し口ごもつた。

「また吐いたんです」

「へえ」

資料に神経を集中させている時、家族の者が些細な用で書斎に入りこんで来るのは、甚だありがたくない。

「けさから、三度目なの」

「どうしたのかな。それじゃ、とにかく堤先生のところへ行って来たらどうかね」

「あなた、早く追い出したそうに、面倒くさそうにおっしゃるわね」

と、春子は不服を言った。

「お仕事すみませんけど」

と、妻の春子が書斎へ入って来た。

老眼鏡をかけて資料を読んでいた野村耕平は、「何かネ」という調子で、煩わしげに振り向いた。

秋の西日が、斜めにさしこんでいる。それがまともにあたって、春子は色つやの失せた顔を妙にまぶしげにしていた。

「気分が、ちつともすつきりしないもんだから」

「なおらないか、薬のんでも？」

「ええ」

「いかな」

「面倒くさそうって、何度も吐くようなら、一ぺん医者に診てもらわなくちゃ、しょうがないじゃないか」

「それはそうですけど、堤先生に診ていただいても、今度のは、もしかすると駄目かも知れない」

「胃癌か？」

この一、二年、四十代五十代の友人知人が、つづいて幾人も、癌で亡くなっている。耕平はしかし、更年期の妻の癌を本気で案じているわけでもなかった。

「胃癌の可能性だって、あるかも知れないけど、そんな意味じゃありません」

「そんな意味じゃありませんなら、何だい？」

「ちっともピンと来て下さらないのね」

春子はもう一度、不平を言った。

「吐いたのは、きょうがはじめてですけど、胸のムカムカがずっとつづいていて、それにこの二カ月ばかり……、わたし、無いのよ」

「何だって？」

野村耕平は、思わず老眼鏡をはずした。

「そりゃ、おい、ほんとか？」

「ほんとかどうか、未だ分りません。だけど、確かだったら、あなた、どうなさるおつもり？」

「驚くね」

彼は呆れたように妻の顔を見つめた。

「驚き、あわて、かつ困る」

友人たちの間では、そろそろ孫の話題が出はじめている。耕平のところでも、長男の誠と長女の加代子は間もなく大学進学、おそく出来た末っ子の友雄ですら、すでに小学四年生であった。

「遠まわしに言つて来るから分りやしない。青天の霹靂みたいな話だが、とにかくそりゃ、あしたにでもすぐ、病院へ行つて来なさい。なるほど、堤胃腸科ではお門ちがいのう」

「病院は行きますけど、あなたがいくらお困りになっても、始末するの、わたしいやですよ」

「うん」

「こりたから」

春子は、一言そう言った。

「しかし、一番困るのはお前なんだがな」

元氣者の麻ちゃんがうちを出て以来、耕平のところでは、手伝いの子を置いていない。置きたくても、適当な人は到底見つからぬ時世になってしまった。

「もしそうと決つたら、その点は、わたしが覚悟しますけ

ど」

「お前一人覚悟して片づく問題じゃないが、四人目でも、やはりそんなに子供は欲しいかね？」

「子供が欲しいというより、ああいうこと、もういやだよ」

春子は答えた。

「だから、そのこともふくめて、よく思案してみなくちゃあ。病院の結果が分るのを待って、よく相談してみようじゃないか」

「よく相談してみようって、つまり、あなたは……」

「いや」

彼はあいまいに首を振った。

「それは、まあ、今考えなくていいよ。俺も多分、考えない——と思うがね」

十数年前、家計は貧しく住まいは狭く、これ以上子供など持てないという暮しをしていたころ、夫婦で計って人工流産の手術をしてもらったことがある。

その後、加代子に八年おくられて友雄が生れ、日々成長して行く末っ子の姿や、よその可愛い女の子の幼稚園にかよった姿など見ていると、彼は時々後悔に似た思いではなくなった。生んでおいてやれば、今あの年恰好に育っているは

ずの者を、親の意志一つで宇宙の間にさまよわせるようなことをしてしまつて、あれで果してよかったのだろうか、少し考えこまされた。春子の悔いは、もっとひどかった。

「ああいうこと」とか、「こりた」とか彼女が言うのは、その意味である。今度の場合はいさし、事情がちがう。なにぶん、二人とももう、いい齡だ。

それに——。春子の告白を聞いて、「困ったことが起つたぞ」と思った、その「困ったこと」の中に、妻に話せない部分があった。耕平は、その部分だけ省略し、

「手術は一応考えないとしてもだね、問題は、四人目の赤ん坊までかかえて、これから家事の雑用を、誰がどうやって処理して行くか」

「第二にだ」

と、指を折って数え立てた。

「第二にS先生が危い。今年中は無理だろうと思う」

野村耕平が、小説家として一人立ち出来るようになる前から三十数年私淑して来たS先生が病床にある。病名は色色ついているが、八十八の高齡で、要するに老衰らしく、御本人自身が、

「もう何もしないでくれ」

と、生きる意志を放棄しておられるような趣があった。

「もしS先生が亡くなれたら、あとあと直接の問題もすることながら、きっと、すぐ全集の話がおこつて来る。これの編纂は、僕として、いい加減には出来ないことだからね」

「それから、第三が例の長編だ。ひどくむづかしいものになりそうだよ、この仕事は」

春子はちょっと笑顔を見せた。上の空の亭主の関心が、自分の方に向いたので、満足したらしい。

「そうね。よく分つてます。でも、案外わたしの方が何でもないかも知れないし」

「何を言ってるんだ」

耕平は、ちょっと舌打ちをした。

「自分で実際、どうなんだい。何でもない可能性の方が強いのか？」

「だから、それが分らないのよ」

次の日、三人の子供を学校へ送り出したあと、春子は身支度をして、ひとり病院へ受診に出かけて行った。

長男の誠が、中学の初年から足かけ四年間、慢性腎炎と

いう厄介な病気で療養生活を送った病院で、東京の西郊、地下鉄の終点に近いところにある。誠は、本来大学二年に在学中でいい年齢なのに、この長患いのため、未だ高校にとどまっていた。

妻の留守中、電話番号をしながら、耕平は色々空想をした。

「俺は、北京の老大人じゃないなあ」

三年前急逝した兄が、昔、北京に在勤中、中国の老富豪の家へ招かれた。設けの宴席につこうとして、ふと兄は、近くの部屋で赤児の泣き声がしているのに気づいた。不審な表情を見せたせいだろう、老大人が、

「おいで、おいで」

と、手ぶりで兄を別室へ請じ入れた。ゆりかごの中で、生後三、四カ月の赤ん坊がしきりにむずかっていた。

「まさか」

と、兄は思った。

あるじの富豪は、堂々とした立派な人物だし、顔の色つやもてらてらと福々しいが、なにしろもう八十幾つの老爺で、白いあご髭を長く垂らしている。

「お孫さんですか？」

聞こうと思った時、相手は悠揚せまらず、にこにこしな

がら、「我的女孩子（私の女の子です）」と、自分の胸を叩いて見せたという話である。母親はむろん、第三夫人か第四夫人だったにちがいない。

耕平は中国の大人とはちがう。第二夫人も第三夫人も持ち合せがない。しかし、「困った」とか「世間態が悪い」とか思う一方、心のどこかで、面白いような嬉しいような気もしないではなかった。
「それでも、やっぱり困る」
と、彼は思った。

自分の血が清潔かどうか、自信が持てないのだ。つまり、身にその種の覚えがある。こんな齢になって、片端の赤ん坊や悪い遺伝質を持った赤ん坊が生れて来たら、どういうことになるか。

「少くとも、俺が内緒でこれの検査をすますまでは、絶対困る」

一番いいのは、春子が、
「やっぱりまちがいでした。内科の外来へまわされて、胃のお薬もらって来たわ」

と言って、帰って来てくれることであつた。

落ちつかぬ思いで、度々時計を眺めていると、電話が鳴つた。

急いで取つたが、相手は聞いたこともない土地会社の男で、伊豆の別荘地に建つマンション購入のおすすみをやり出した。

「うちにそういう電話をかけて来ても、無益だから、やめなさい」

ぶっきら棒に言つて、耕平は切つてしまった。

春子がソーセイジだの豚肉だの菓子だの、ついでの買物をして、病院から帰宅した時には、二時が少しまわつていた。

「どうだったんだ？」

「おめでたですと言われました。今、二カ月の終わりです。順調で、異常は何も無いそうよ」

春子は、一種誇らしげな様子で、畳の上へ坐りこんだ。

「昔の人は一般に子だくさんでしたから、あなたぐらいの年齢での出産も、ごく普通のことだったんです。それが近ごろ、みんな、早く子供を生むのをやめてしまうものだから、珍しがられるんですが、羞しく思うことなんか、少しもありません。神様の御祝福がありますよって」

「そうかね。神様の御祝福ね」

病院は、プロテスタントS派教会の付属で、戒律がきび

しく、医者も看護婦も敬虔な信者である。

「でも、坂井先生や看護婦の原さんや、みんなにおめでとう、おめでとうって言われて、やっぱり少し羞しかったけど」

「それで、おろす相談は全くなかったのか？」

「しませんよ。何故？」

妻は、疑わしげな眼つきで見返した。

「予定日は、来年の五月はじめだそうです。こんなにはつきりしても、あなた、未だお迷いになるの？」

「いや」

耕平は口ごもった。

「そういうわけでもないが、きのうから言ってる通り、生むとなれば、困った問題が山ほどある。それについての対応策を、一つ一つ考えなくちゃあならん」

第一に考えなくてはならぬ「対応策」は、血液検査の結果が悪かった時、どうするかであった。

決定延期の手段として、彼は齢のことを持ち出した。来年、野村耕平は数えの五十三になる。

「俺が五十三なら、七つ引いて、お前は来年四十六だろ」

「いやねえ」

春子は顔をしかめた。

「齢は満で言っておきよ」

「満で言っても、四十四だ。俺が、死んだ広島のおばあさんの四十二の時の末っ子だが、お前はその記録を更新することになるよ」

「人をお婆さん扱いして、わたしがいやがるように、いやがるように、ものを言うのがお好きね」

「お好きでもお好きでなくても、そういう勘定になる。いやがらせで言ってるんじゃない。満で四十四、数えて四十六、その齢で高年出産をして、ほんとうに大丈夫なのか？」

「だって、産婦人科部長の坂井先生が、何も異常はありません、大丈夫ですっておっしゃってるんだもの」

「だけど、俺が一番心配してるのは、お前からだだからね」

春子は、「嘘くさアいわ」という顔をした。しかし、どこが嘘くさいかは、よく分らぬらしい。

「ともかく、今すぐ決めなくちゃならんわけでもないだろう。一度、誠や加代子の意見も聞いてみたいし」

「みんな喜びますよ」

春子は言った。

「そうかな」

「まあ、加代子は、わたしの代りに家のことしなくちゃならないのが眼に見えてるから、何て言うか分らないけど、誠と、特に英雄は喜ぶと思うわ」

麻ちゃんが結婚して川崎に牛乳屋の店を出し、飼犬のゴンはフィラリヤで死んでしまつて、弱虫の末っ子には、それ以来、子分扱いしてウサを発散出来る相手がいない。来年度の五月、弟か妹が生れると聞かされたら、実際喜ぶかも知れなかった。

四時ごろ、英雄がきたないランドセルを背負つて帰つて来た。六時すぎには、誠と加代子も帰つて来た。加代子は、病氣でおくれた兄を追ひこして、高校三年生になつてゐる。

耕平は、折を見て、上の二人にだけ万般の事情を説明し、「どう思う?」と聞いてみるつもりであつたが、そのうち台所の方から、

「ちよつと、母さん、それ、嘘でしょ」

と、夕餉^{ゆうぐ}の手伝いをしていた加代子の、とてつもない頓狂な声が聞えて来た。

「何だ、もう話したのか」

テレビでニュースを見ていた耕平は、二人のところへ顔を出した。

「オドロキ桃の木サンショの木。ねえ、お父ちゃん、これほんと? アトムもびっくりつていうくらい——驚いたねえ」

この娘には、およそしとやかなところが無い。学校では「ミスター・ノムラ」、または「鉄腕アトム」で通つてゐる。

騒ぎを聞きつけて、

「何よ? 何を驚いたんだ」

「ねえ、どうしたの? 母さん、どうしたの、ねえ」

と、二階から大きいのと小さいのと、二人の男の子がどやどや駆け下りて来た。

「ちよつと待て。騒ぐな」

耕平は言つた。

「晚めしを食いながら正式に発表するから、お前たち、鍋とか取り皿とか、運べよ。それから冷蔵庫のビールを一本」

今夜は少し冷えるようだ。ガスをつけると、間もなく、豚ちりの土鍋が白いあつたかそうな湯気を立てはじめた。ビールの栓を抜いて、

「実は」

と、彼は切り出した。

「もう分ったと思うが、きょうお母さんが病院に診察に行つた結果、来年の五月ごろ、うちにもう一人、子供が生まるらしいということになった。順調に行けばの話だが」

「わあッ」

と、三人の子供が歓声を上げた。

「騒ぐな。大きな声を出さずに、よく聞きなさい。喜ぶのは結構だが、これについては、色々問題がある。困った問題があつて、俺たちとしては、そう手放して喜べない」

「困った問題とか、順調に行けばとかつて、まさか変な処置をする気じゃないでしょうね？」

長男が言った。

「そんなこと、絶対反対だよ」

と、加代子も言った。

「変な処置って、何よ？」

友雄が質問したが、みなは無視した。

「ねえ、母さん。それであなた、今何カ月目？」

加代子が一人前の口をきき、誠は、

「そうすると、八月のそのころ、お二人の間でそういうことがあつたわけですか、へええ」

と感心して見せた。

「トンくんの前で、やめなさい」

春子がたしなめた。

末の子は、

「ねえ、トンくん分らないよ。そういうことがあつたって、どういふことがあつたのさ？ 何故トンくんの前で話しちゃいけないのさ？」

知つていてとぼけているのかも知れないが、しきりに聞きたがつた。

「あのね、みんなで喜んでくれるのは嬉しいけど、これはほんとにたいへんなことなのよ」

春子が言い出した。

「来年、お父さんはお仕事が非常に忙しくなるし、麻ちゃんはどういうにしろ、みんなで自分の身のまわりのこととか家のこと、責任を持ってきちんきちんと片づけてくれるようでなくちゃ、とても赤ちゃんなんか生めないんですからね」

「分つてる。トンくんの世話ぐらい、してやるよ。ただし、枕のはしっこかじるのだけ、もうよせよナ。お兄ちゃんの弁当も、仕方がないから作ってやる。おしめの取替え、こいつは興味あるけど、くさいかな」

加代子が言うのと、

「トンくんも分ってるよ」

友雄が言った。

誠は、ただにやにや笑っている。

とにかく、子供たちの喜びようは、想像以上であった。

「トンくん、男の子がほしいなあ。弟がサ」

「加代子、断然女の子。二対二でちょうどよくなるじゃないか」

「じゃあ、女の子が生れたら、名前、何てつける？」

家族全員この調子では、耕平としても、あとへ引けぬ感じになって来た。

「何か、もう少し食うもの無いのか？」

と言いながら、彼は二本目のビールを抜いた。そのうち、ほろ酔い機嫌も手つだって、

「あの方も、たいてい大丈夫だろう」

という気がし出した。身に覚えがあるといっても、妙な吹出物が出るとか、そういう徴候は、今のところ何も無い。

「S先生の、最晩年の短編の題が『夕映え』というんだが」

彼は大きなグラスに、自分でビールをなみなみとついで。

「俺も、最後の夕映えのつもりで、一つ決心するかね」

「あたり前だよ。今さら何の決心よ。大体、夕映えってほどの齡じゃないでしょ」

「それはまあそうだが……、お前」

耕平は妻に向って、

「こうなったら、至急手伝いの子をさがすことを考えろよ。長島の麻ちゃんの母親のところへも、手紙を書いてみるんだな」

「やってみますけど」

一人だけ食欲の無い春子が、大儀そうに答えた。

「でも、子供が三人あって、その上もう一人赤ん坊が生れるっていう家に、今どき来てくれる人、なかなか無いでしょうねえ」

「むつかしいだろうが、極力つてを求めてさがしてみなくちゃ」

と、耕平はつづけた。

「加代子が十分やる気になってくれているようだが、加代子も来年早々、大学の入学試験で忙しいはずだし、誠と友雄は、いいか、出来るだけ自分のことを自分でやる癖をつけるんだ。お母さんは手伝いの子をさがす。俺は——」

きのうから、頭のすみで考えていることがあった。

「俺は、誰か秘書を雇おうと思うんだよ」

「秘書？」

「秘書って、それ、女性秘書？」

「お父さんが、女性秘書」

加代子と誠が異口同音に言い、

「あなた、うちに女の秘書をお置きになるつもりなの？」

と、春子のはなはだしく疑わしげな顔をした。

妻が何を想像しているかは、すぐ分った。それを反射して、耕平の脳裏にも、多分それと同じだと思われる光景が浮かび上った。

——重役室の椅子の上で、肥った中年の重役が膝に美人秘書を抱きかかえている。そこへ本妻さんが闖入して来て「わあッ」とわめいている、アメリカの漫画によくあるあの場面である。耕平はしかし、そんなけしからん光景なぞ考えてもみなかったような、むつかしい表情をして、

「だって、そうでもしなくちゃ、とてもやって行けないんじゃないかな」

と言った。それから、

「小説家というのは、小なりといえども、みんな一国一城の主でね」

主として長男の方に向って、秘書雇い入れの必要性を説きはじめた。

「つまり、小企業の社長さんさ。ところがこの社長は、社長であると同時に営業部長であり、筆工であり、時には配達係までやらされる」

「それで？」

「それでということはないが、かりに俺が、どこかの会社へ勤めていたとしてみなさい。今ごろ、秘書の一人や二人いたって、別におかしくない齢だろ。うちでは今まで、お母さんが、この野村合名会社の庶務課長兼秘書課長兼炊事係をつとめて来た。立派な秘書課長だったがね、赤ん坊が生れるとなれば、この役を免じて出産休暇を与えて上げなくちゃならん」

それとなくおだててみたつもりだったが、春子は依然、こだわった顔をしている。

「おっしゃることは分りますけど」

と言った。

「わたしだって分るけどさ。母さんの入院中に……、ねえ、ちょっといやな感じ」

加代子が母親の味方をした。

「へんなこと言うなよ。俺は二号を置く相談をしてるんじゃないんだ」

食卓の気分が、少し変った。